

「グリー」大成長の影で批判高まる異様な課金システム

実業界

6

The Analytical
Magazine
for Economics

2012

創刊1000号

毎月1日発売

昭和27年2月28日現在国土庁登録第1000号
毎月10日1日発行 平成24年6月1日発行 第1000号

「みずほFG」

生き残りかかる
ワンバンク化で
見えぬ活路

■「大和証券」

長すぎる充電期間に
強まる手詰まり感

■「加賀電子」

唐突に発表された
“子会社不正取引”に
広がる波紋と謎



口の機能は、人生の最後まで維持したい、誰もがそう思う。

「どういう時に健康と感じるか」というアンケートに、多くの人が「食事をおいしく食べられること」と回答していることから分かる。

食べる、話す、笑う、飲み込む…。こうした口に関する機能を維持するために、非常に大切な役割を担っているのが、**だ液**である。

ヒトが健康に生きていく上で、だ液の果たす役割は、一般に知られている以上にかなり多様だ。

当コラムでは複数回に分けて**だ液**を、分かりやすく解説する。

さて、だ液の分泌が減ると、炎天下で水分補給もなしにハードな運動をした後のように、口の中がカラカラに乾く状態となる。

夏場でもないのに常時、水分補給で口の中を潤していなければかなり



不快なものだ。

虫菌や、歯周病の患者さんほど多くはないが、口腔乾燥症（いわゆる「ドライマウス」）に苦しむ患者さんは、増加傾向にある。

「ドライマウス」は、かつては、シニア層に多い症状とされていたが、前号のコラムでも紹介したように、ストレス性のドライマウスが、若年層にも増えている。

ストレスで、だ液の分泌が極端に減り、口の中が乾燥し、ひどい口臭につながるやっかいな症状だ。

正常なヒトのだ液の分泌量は意外

だ液——健康・老化を司る妙薬

と多く、一日約一・五リットル、若年者では二リットル近くも分泌するものが、ほとんど分泌されなくなるのだから、症状としてはかなりつらく、口臭による新たなストレスを誘発してしまう。

唾液腺には大きな唾液腺と小さな唾液腺がある。

大きな唾液腺には耳下腺、顎下腺、舌下腺があり、耳下腺はサラサラ、舌下腺はネバネバ、そして顎下腺はその中間というようにそれぞれ状態の異なる唾液を分泌している。

同じだ液といっても、サラサラ、ネバネバとその状態が異なれば、役割も別々なのだ。

サラサラのだ液は、食べ物をスムーズに胃に運ぶ役目を果たしている。ネバネバのだ液は、口中や、胃腸の粘膜を保護する役目がある。

だ液にも種類がある、という話を患者さんなどになると、かなり驚かれるが、読者の皆さんは如何だろうか？普通に生活していて、口の中で、その違いを感じることはないにせよ、ヒトの体の機能は実に良く出来ており、ドライマウスのような病気が、いかにヒトの体にとって深刻なダメージを引き起こすかを感じて

いただければ幸いだ。

だ液には、食べ物の消化を助けたり、口腔内の汚れを洗い流し、弱酸性に保つことで虫菌の繁殖を抑えるなど、天然の洗口液とも言える。

さらに、だ液は、全身的な健康を維持する上でも実に様々な役目を担っている。その働きは、言わば「カラダの万能薬」とも、古からは「不老長寿の妙薬」とも言われてきた。

だ液には、糖を分解する酵素、脂質やでんぷんを分解する酵素、抗菌作用のある物質、免疫作用に関係するIgA抗体や、老化防止ホルモンや成長ホルモンなどヒトが健康に生きていくために不可欠な様々な物質が含まれているのだ。

たかが「だ液」と思わなかれ。

不老長寿とまではいかずとも、健康かつ長生きのパロメーターとも言えるのがだ液の分泌量。だ液の分泌を維持していく最良の方法は、良く噛むことだが、次号では、噛むこととだ液の関係について論じたい。

顎関節症

ドライマウス

舌痛症

亀井英志
Kamei Hiroshi

ストレスは

見える！

すべては「噛みしめ」が原因だった

気がつくとも歯を食いしばっている。…心当たりの方は、当コラムの亀井医師の著書「すべては「噛みしめ」が原因だった」をお読みいただきたい。*未病。の原因をまとめた良書です。

亀井英志(かめいひでし)

1951年群馬県前橋市生まれ。76年東京歯科大学卒。都立病院歯科口腔外科医を経て、84年より長栄歯科クリニック院長。臨床ゲノム医療学会理事。

